おお大勝利

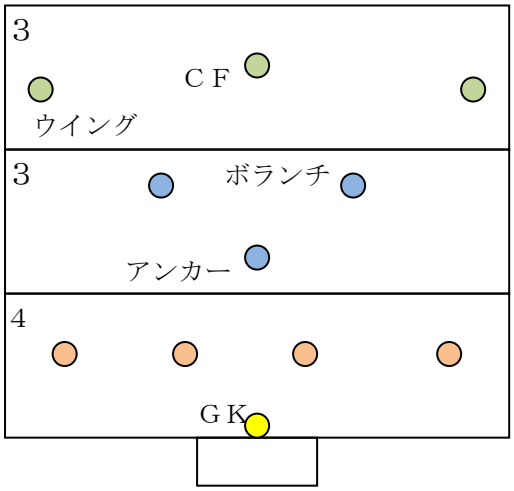
平成 27 年度山東サッカー部報第 9 号（7 月 23 日）

サッカー部保護者の皆様、ＯＢ・ＯＧの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

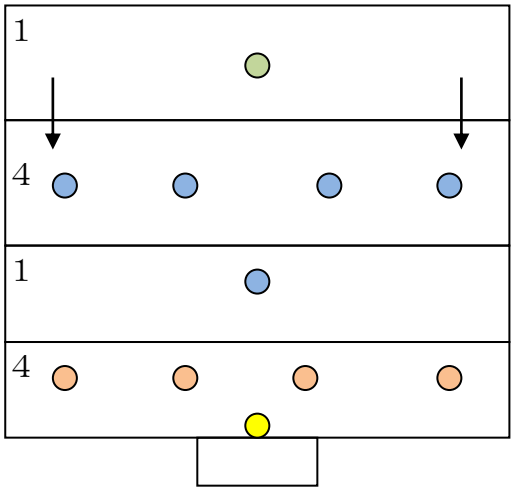
新チーム Y1 2連敗スタート

7 月 11 日（土）、20 日（月）ともに天童第二（人工芝）にてＹ１第 8、9 節が行われました。第 8 節日大山形戦は、新チーム初戦。日大はここまで全勝のチャンピオンチーム。山東新チームなど恐るに足らないはずですが、日大Ｊコーチは「新チーム初戦か。こういう試合、結構良いゲームになるからね。」などと、やや警戒気味。もちろんその口吻には余裕が漂うものの、新チーム初戦にすら少々のやりにくさを感じるあたり、さすが勝負に辛い。第 1 節のＹ１初戦は 3 年生チームながらボロボロの出来で、山東の 2 アシストによる 0 対 6 の完敗だった。新チームになって勝とうなどとはおこがましい。選手には「まず間違いなく負ける。ただ、しっかり戦うところ逃げずに戦って、少しでも粘りある戦いをして負けるのと、何もせず負けるのとでは違うぞ。」と声掛けし、**勝敗以前に果敢に挑む気持ちの重要さを説く**。また、**アンカー＋2 ボランチという、中盤を逆三角形にしたシステムで臨む**。このシステム、ＦＣバロセロナなど攻撃的なチームでは、アウトサイドがウイングと呼ばれＦＷの扱いとして４－３－３（図 1）と呼ばれますが、山東のアウトサイドはあくまでＭＦの扱いで、システム名で言うなら４－１－４－１（図 2）。アンカーとボランチ含めトリプル

【図 1】４－３－３

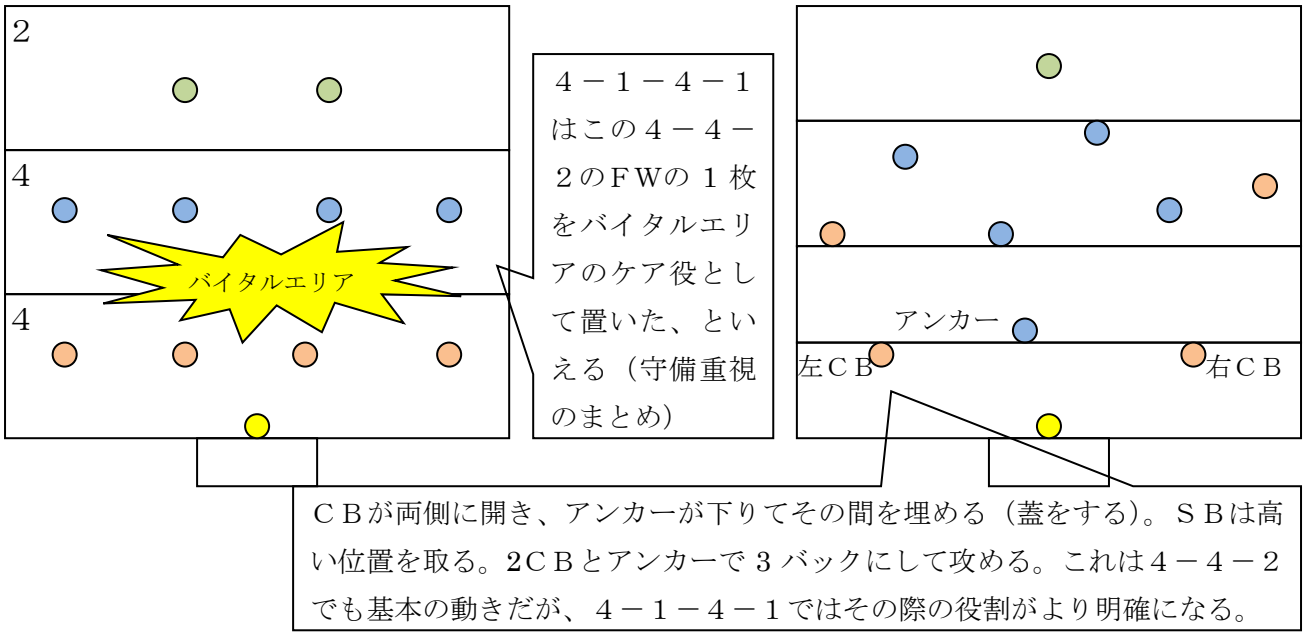


【図 2】４－１－４－１



ボランチとも言え、４－３－３と比べ守備重視のシステム。2 列目の 4 枚のＭＦと 4 列目の 4 枚のＤＦの間（バイタルエリア　図 3）を埋めるアンカーを採用し、守備に目配りしている。もちろん、攻撃参加の攻め上がりがあれば、攻撃も十分可能。まあ、ここらへんは「並び」の問題だけなので、あまり詳述しても仕方がない。**選手が場面場面でどう判断しどう動くかが重要。システムはカオスにならないための立ち返る場所を選手に示したに過ぎない**。ただ、攻撃時、アンカーがＣＢの間に入って「蓋をして」ＳＢの攻め上がりを期待し、手厚く攻めようという意図をより明確にするために、従来採用していた４－４－２システムから

【図 3】４－４－２システムにおけるバイタルエリア　【図 4】攻撃時の布陣の変化



「変更」したという側面はあるし、それは選手にも伝えてある（図 4）。

さあ、日大相手にどうなるか。清野総監督（保護者会名誉会長）、後藤報道局長、齋藤ＧＫコーチ、そして多くの保護者の皆さまが来て下さった。**ＧＫクロサカ、右ＳＢカズマ、ＣＢシュンとワタコー、左ＳＢリキ（１年）、アンカーサンペー、ボランチはタイセー（１年）とカイト（１年）、右ＳＨカンタ（１年）、左ＳＨタクオ、トップがユウト**という布陣でスタート。まず入り、予想通り押されまくる。跳ね返してもルーズボールを奪われ、波状攻撃。しかし、開始すぐに得点は許さず。少しして、ミドルシュート？で失点。この失点、コースはそこそこ良かったですがニアサイドだし、ＧＫに頑張ってもらいたかったところ。まあ、あまり多くは要求してはならないと自分に言い聞かせベンチで黙る。前後半通じて、ゴールキックがとても多かったが、クロサカのキックに期待してＤＦが上がるばかり。「ＤＦがどうして受けてくれないんだろ～」とぼやく齋藤ＧＫコーチ。確かに、**クロサカのひ弱なキックを日大のＣＢが常にヘディングで大きく跳ね返し続け、繰り返し「ゴールキック⇒ピンチ」となっている。そういう流れを変えるべく、どうしてＤＦがボールを受けないのか。ただ、ＤＦも自信がないんでしょうね。ボールを受けてもすぐ失いそうな気がしてしまうのでしょう**。山東の選手、まずは自信をつけるところからスタート、ということなのでしょう。試合は一方的だったので、内容は割愛。あっ、一点だけ。直接シュートが狙える距離でＦＫを得た時、シュンが蹴りに行く。いままではカツミでしたが、この代ではシュンなんだと思う。確かにシュンのキックはうまいし飛ぶ。なるほどねなどと思っていると、ベンチ後ろのバックアップメンバーから「ぶれ球・・・」などと聞こえてくる。「えっ、シュンそんなの蹴れるの？」と問うと「シュンすごいっすよ」と誰かが期待を持たせる。そんなで期待して見ていると、期待に違わないぶれ球が日大ゴールを襲う。コースがやや正面だったため日大ＧＫに防がれましたが、今後に期待させるＦＫでした。さて、試合終盤、スコアを取っているマネージャーワカバ（2 年）に「何点入った？」と聞く。何点も入れられているのは分かっているが、正確に何点かは分からなくなっている（それくらいやられている）。すると何と 5 点とな。ということは、3 年生がいた時は 6 失点だから、新チームは 3 年生チームを上回るかもしれない。**新チーム諸君は攻められているが、繰り返される日大ＣＫにも失点せずに粘っている**。「よ～し、褒めることの少ない試合だが、先輩を上回ったぞ」と褒めてやれるな、と思いベンチでほくそ笑んでいると、ホントの終盤の 2、3 分で立て続けに失点し、結局 0 対 7 の敗戦・・・。日大山形の選手の攻守にわたる獰猛さに為す術なく

蹂躙された形。**ヘディングも、「どうせ負けるから」と避け気味に見えた。走れない、競れない、もちろんボールを保持し続けられない。すべてを改善しなければならない**。

この日、山東がリーグの主管（運営）だったので、選手たちは次の試合も観ている。聞くと、リーグ戦が終わってから 2ｈほどグラウンドが空くとのこと。ならば、と思い、公式戦終了し後片付け終了後、練習すると選手に告げる。**最初、冗談だと思ったらしく笑顔で聞いていた一部選手たち（運営のため本部テントにいた数名）の顔から、笑顔が消えていく**。選手によっては 90 分戦った者もいたため、「今からですか？」という雰囲気。**何を言ってるんだ、このアンポンタン！　大して走ってないだろ、だって走れない（戻れない、駆けあがれない、ボールに寄れない、ボールを奪いに行けない）んだから**。ということで、試合後、90 分ほど練習。練習内容は**クリスクロス**！！　この練習名よくわかりませんが、一部指導者はクリスクロスと呼んでいます（山形二中出身の一部指導者）。私は山形一中出身なんで、カッコよく**スリーメン**と呼んでよくやっていました。まあ単純に、3 人でボールを回しながら前に進むだけです[1]。ただ、スピードを殺さずにトラップしパスをし続ける、ボールより前に出てボールを受ける、というのを徹底するのはやや難しい。走力のない山東にはぴったり。というか、体力トレーニングでもあるんですが、指導者としては**ボールを受ける練習のつもり**。山東の選手、ボール保持者が前を向いていても、全力で走ってその選手より前に行ってパスの選択肢になることをしない。カバーリングだか何だか知らないが、ドリブルする選手のケツを後ろから見ているだけ。これでは攻撃の枚数は増えない。もっとボールの前に出て受けに行かなければいけない。ということで、スリーメンなんですよ。いろんなバリエーションでスリーメンをやり、途中から最後はセンターリングからのシュートという設定にして、練習を行う。**山東の選手は新鮮だったのでしょうね、試合後なのに意欲的に取り組んでくれました**。

さあ、そのスリーメンの成果が測られる次戦[2]が 7 月 20 日東海戦。東海は例年 3 年生主体ですが、前節、今節と登録メンバーは全員 3 年生。2 年生がいた方がテクニカルなんですが、3 年生だけの方がまとまっているというか、よく頑張るイメージ。正直、3 年生だけのチームの方が嫌です。この節、タクオをトップにし、左サイドにユウトというように前節の関係を逆にする。また、前節ボランチだったタイセーを右ＳＨにし、カンタの代わりに**小兵ベジータ（1 年）**[3]をボランチで起用。モンテＪｒユース村山出身者間の入れ替わり。ベジータについて、前々からボールを失わないトラップ（ボールの運び）、負けず嫌いのメンタリティ、ボールへの執着心は評価していましたが、前節、まだ早いと先発起用を見送りました。練習試合を通して、チャンスに果敢に顔を出し運動量が増えてきたと好評価。さあ試合開始。試合の入りはどっちつかず。**もちろん東海の迫力に押され気味ですが、少しずつパスワークで東海ディフェンスをはがすシーンが増えてくる**。山東のサンペー、カイト、ベジータの逆三角形、悪くない。ちょこまかしたパスで大男を振り回している。東海は強豪チームらしくアウトサイドにスピードある選手を配置しており、1 年左ＳＢリキなんかはスピードでかなりぶっちぎられており、きりきり舞い。しかし、ＣＢワタコーとシュンは安定した働きを見せている。特にシュンは、つなぐ

---

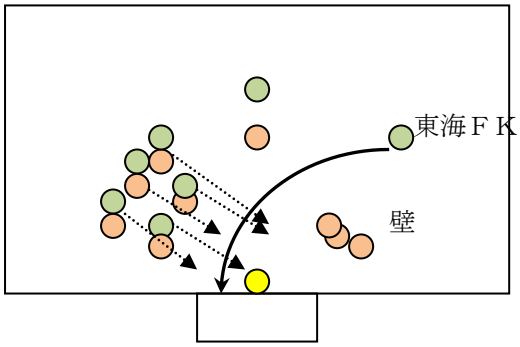
[1] 3 人の真中にいるボール保持者がどちらかにボールを出すと、その選手はボールを受けた選手の外側に回る（クロスオーバー）。今度は逆サイドにいる選手にボールを出しまた外側に回る。これを続けるだけ。クリスクロス、**確かにクロスするんで、クロスは分かるんですが、クリスがよくわかりません。事情通の方山東顧問までご一報ください（「～中学でもクリスクロスと呼んでいた」という情報も歓迎）**。

[2] ちなみにスリーメンの練習はその後も続けて行いました（一度だけではありません）。

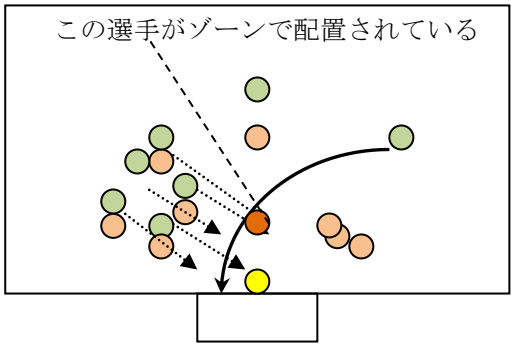
[3] ベジータは、私が山東に来てから最も小さい選手。サッカーでも高さはウリになりますが、高さがなくても活躍している選手はたくさんいます。現在現役最高選手との呼び声高いメッシだって小さいです。ちなみにベジータというあだ名は、シュンというこれまでの呼び名では 2 年のシュンと被るので、あだ名決定⇒小さいからこれから伸びることに期待して如意棒を顧問が提示⇒本人拒否⇒では悟空はと顧問が再提示⇒本人納得せず⇒んじゃベジータはとの再再提示⇒本人快諾、という流れで決定されました。

ところ、大きく外にクリアするところの使い分けがうまい。「鋼の股間」ワタコーさんも、大きな声を出してヘディングしたり、存在感を見せている（ただし、ヘディングのボールがしっかり前に飛んでいない＝上体の振りの方向性とボールの飛ぶ方向性が異なること多い）。右ＳＢカズマはマッチアップで決して引けを取っていない。さすが**「（ボールの）狩人」**だけある。トップのタクオは相変わらず意味不明なボールコントロールで味方をも（本人をも）欺いているが、運動量豊富なので東海ＤＦやＧＫの油断したすきに何度もアプローチし、持ち味を発揮している。ＧＫクロサカは、相変わらず守備範囲が小さいが、いつになくキックが好調だし、がっちりキャッチしてほしいボールをこぼさず捕球している。**クロサカも（やっと）向上してきた！**ということで、**前半５分５分の展開**。「いいぞ、いいぞ。今日はいけるぞ。」とベンチでうれしくなる。前半のうちに早くも故障明けの相手の長身ＣＢをピッチに引きずり出すことに成功。東海も本気を出してきたということか。そんな５分５分の展開の中、ＦＫから直接ねじ込まれ先制を許す。このＦＫ、対応が稚拙というか、これまでの決まりごとを守っていないというか。**このシーンでは山東の選手が全員マンマークで対応してしまい、ゾーンで対応する選手がいなかった**（図５）。そうすると、ＦＫでゴールマウスをとらえるボールを蹴られると、相手が先に触っても一点、誰も触らなくても一点という形になりやすい。だって、ＧＫは、ボールの軌跡に選手が入ってくるため、ＦＫのボールの軌跡にばかり対応していられない（相手のヘディングシュートなどにも対応しなければならないから）。よって、誰も触らなくてもそのままゴールインしてしまい失点となることが多い。東海戦の一失点目はまさにこれ。三年生チームでやっていたように、**しっかりヘディングの強い選手をゾーンでファーサイドに至る軌跡上に配置していれば[4]、何ら問題なかったはず**[5]（図６）。ということで、前半０対１。

【図５】ゾーン対応の選手がいない



【図６】ゾーン対応の選手がいる



ハーフタイム、ＦＫの守り方やヘディングの競り方など修正したものの、とても良く試合ができていることを褒め、後半は負けないこと（少なくとも後半引き分け、あわよくば勝ち）を狙うよう指示して選手を送り出す。

さあ、後半。後半も前半は一進一退。右ＳＢカズマが駆け上がり、惜しいシュートを放つ。ドリブルのコースがもう少しゴールに直線的だとよりチャンスになった[6]。そしてそのシュートがＣＫへとつながる。「は～、チャンスだったのに、カズマ何で角度ないところにボール運んでんだよ。」とチャンスをふいにしたことから気持ちを切り替えることができずに漫然とＣＫを見つめていると、**サンペーから低いＣＫが蹴られる。それをニアサイドでまたもやカズマが一瞬早く触り、同点ゴールをねじ込む。カズマ、ゴールの狩人にもなっちゃった！！！**　いいね、いいね新生山東、ＳＢがチャンスを作り、そしてＳＢがゴール決めちゃう。よ～し同点だ、と

---

[4] ニアサイドは壁が消している。

[5] ３年生チームではこの役をタツルがやっていた。今年の県総体２回戦ＦＫからのムンタリのスライディングシュートも、相手がゾーンで人を配置してくれれば、山東の得点はなかったはず。

[6] どうしても、カズマやタイセーなどボールを過度に右側に置きたがる選手は、ゴールに直線的に迫れる（ゴール方向を向いてプレーできる）場合でも、右、右へと行ってしまい、ゴールから遠ざかってしまう傾向にあります。

意気上がる山東。しかし、その後手厚く攻めることはできず。**東海の選手たち、失点にも「焦らずやろう」と声を掛け合う。焦らずにじっくり料理すれば、必ず山東から得点できることを選手たちは冷静に見極めている**。後半の後半はディフェンスラインでの落ち着いたボール回し、逆サイドへのサイドチェンジ、山東アンカーへのプレッシングなど、やるべきことを徹底してやってきた印象あり。対する山東、耐えてボールを大きく蹴るので精いっぱいになってきた。**アウトサイドを打開され、中央での対応のまずさを的確に突かれ、結局失点し、万事休す。1対2で敗戦。**正直、強豪相手に良くやりました。もちろん勝ち点1、あわよくば3欲しかったですが、後半の試合運び、やはり東海が 1 枚上手でした。選手は試合後呆然。そうでしょう、競った勝負落としたんですから。ただ、こういう競った試合をしていくことが、チーム力向上のために必要なこと。**修正点は多々あるものの、胸を張って敗戦を受け止めていい試合でした**。タクオ、カイト、ベジータなど、シュート練習（キック練習）をもっと積んで、チームを助け自らヒーローとなるプレーができるようになり給え（この試合はヒーローになり損ねた）。

保護者の皆さま、ＯＢ・ＯＧの皆さま、応援ありがとうございました。そういえば、ハーフタイムに気付いたのですが、ＯＢで**新潟大学医学部5年インテル**[7]**（山東61回卒）**が応援に来てくれていました。相変わらずクマのぷーさんみたいでしたが、卒業してしばらく経つのにいまだに後輩に目をかけてくれて、うれしかったよ。そういえば、インテルさんは一昨年の苗場にＯＢとして来てくれた。**今年の苗場では、同期のカツラギ（61回卒）からマサ（62回卒）、ヤグチ（64 回卒）、シュータロー（65 回卒）と四人参加してくれる予定**です（もちろん選手として）。ＯＢＯＧに支えられる現在の山東です（選手が 22 名とフェスティバルにＡＢ2 チーム出るには心許ないので）。

公式戦はしばらくありません。**7月26日宮城県牡鹿半島にて震災復興ボランティア、7月30日～8月1日月山合宿、8月4日～7日苗場フェスティバル、8月8日山東サッカーフェスティバル（ＯＢ戦／ナイターサッカー）**という夏休みの主な予定です。山東選手諸君、この時期に力を蓄えましょう。

---

[7] イタリアのインテル（長友在籍）のユニフォームをやたらに着ていたので、皆からインテルと呼ばれるようになった選手（not 顧問命名）。彼自身はＧＫでした。